



サービスの内容 エルム撫川くるみ庵 管理者 長谷川康子 青山達哉

グループホームは、認知症の診断を受けた要支援2から要介護5の介護認定を受けた方が入居する施設です。1ユニット9名までの小集団の生活の中で、スタッフとのなじみの関係を作りながら、日常生活上のお世話、機能訓練などのサービスを提供しています。

在宅療養を支えるチームとしての役割

入居者の生活を一番近くでサポートしている立場として、住み慣れたこの場所で安心して過ごすことができるように、かかりつけ医との橋渡し役として携わっています。

事業所の特色

当グループホームは、「利用者の尊厳を守り、その人らしい生活を提供する」を理念に、その人のありのままを尊重して、認知症ケア・介護サービス提供、協力医療機関と連携を図り、看取り介護を行っています。季節を感じられる行事や地域との関りを大切にしています。同じ敷地内に、デイサービス・入所施設・居宅介護支援の事業所があるため、状態に応じた総合的な介護サービス提供を行っています。



グループホーム
エルム撫川くるみ庵
〒701-0164 岡山県岡山市北区撫川830番
TEL 086-292-8818



つばさ新聞

理事長のコメント

最近は大いぶ秋らしく過ごしやすい季節となってまいりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

さて、秋と言えばやはり「食」でしょうか。「食」は僕自身にとっても、在宅で生活される患者さんにとっても、生活において必要不可欠なものであり、且つ生活の原動力になるものです。当院は、数年前より在宅患者さんに、その「食」に関する支援を行っています。患者さんの「いつまでも食べたい」「一口でも食べたい」などの様々な思いに寄り添い、さらにそれを叶える為、管理栄養士と言語聴覚士が中心となってNST（栄養サポートチーム）として活動しています。

ぜひ皆様の「食」への思いを遠慮なくお聞かせください。その思いをカタチにするため、様々な方法を用いてチームでアプローチし、「食」の面からも患者様の在宅療養をサポートしていきます。

(医療法人つばさ 理事長 中村 幸伸)

ソーシャルワーカーの豆知識

身体障がい者手帳についてみなさんご存じでしょうか？

身体の機能に一定以上の障がいがあると認められた方に交付される手帳で、この手帳により、交通機関の料金割引、税金控除、医療費が軽減される制度（重度心身障がい者医療助成制度）など様々なサービスが受けられます。脳梗塞を患って身体に麻痺がある、ペースメーカーの埋込をした、肺気腫によって呼吸苦がある、視力や聴力が低下しているなど、様々な障がい対象となります。

申請に関するご相談がある方は、当院 MSW まで遠慮なくご連絡ください。

新人職員紹介

医師

尾内 一信

旅行、映画鑑賞



川崎医科大学で小児科の診療と研究、教育を行ってまいりました。今後は、在宅医療を通して社会に貢献したいと思っています。

看護師

小野 琴美

パン屋巡り
ムーミンが好き



患者様が自宅で安心して療養生活が送れるようにお力になりたいと思っております。不慣れな点もあるかと存じますが、どうぞよろしくお願いたします。

医療ソーシャルワーカー

眞田 玲緒奈

一眼レフカメラ、旅行



新しい発見や経験がたくさんで毎日勉強しています。慣れないところもありますが、頑張ります。よろしくお願いたします。

看護師

山本 美映

料理、韓国ドラマ鑑賞



患者様・ご家族の方に寄り添い、少しでもお力になれるよう頑張ります。よろしくお願いたします。

つばさクリニック つばさクリニック岡山

定期訪問 午前9時～午後5時 緊急往診 24時間対応

診療科目 訪問診療・内科
循環器科・呼吸器科・整形外科
〒710-0047
岡山県倉敷市大島534-1
TEL 086-424-0283
HP: www.tsubasa-clinic.net

診療科目 訪問診療・内科・小児科
〒700-0026
岡山県岡山市北区幸遷町1-7-7
TEL 086-254-0283
www.tsubasa-okayama.net



想いでエピソード

つばさクリニック 看護師 川井田 佳美



つばさクリニックの看護師として、在宅医療に携わるようになって、今年で13年目になります。この間、たくさんの患者さんやご家族との出会いがありました。その中で、私が心に残っているエピソードを1つ紹介したいと思います。

その患者さんは70代の男性で、癌の終末期の方でした。抗癌剤治療のため、何度も入退院を繰り返しておられました。毎回入院するときには、奥様が泊まり込みで付き添いをされていましたが、コロナ禍の面会制限でそれが出来なくなり、患者さんは1人での入院を余儀なくされることになりました。

入院中、寂しさや不安からせん妄状態となり、普段はとても温厚な性格の方が、大声を出して暴れるようになったため、予定より早めに退院されました。癌の痛みを十分にコントロールできないまま退院となったため、家に帰られてからは、痛みが強く、ベッドから動けない状態が続きました。食事もほとんど食べれず、どんどん衰弱していきました。

そのような状況でしたが、患者さん自身は「もう二度と入院したくない」と言っており、ご家族も入院中につらい思いをさせてしまったことを後悔されていたため、入院はせず、最期まで自宅で看っていく決心をされました。その時点で、当院への訪問診療の依頼がありました。介入後は、薬で痛みのコントロールを行い、食事も少しずつ摂れるようになりました。ご家族の献身的な介護の甲斐もあり、その後1ヶ月ぐらいはご自宅で穏やかな時間を過ごすことができました。

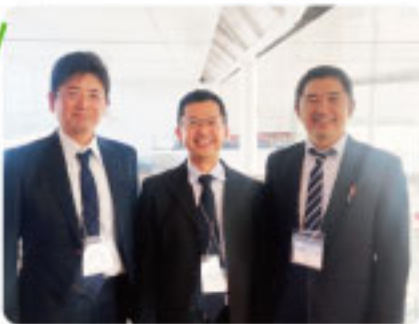
最期はたくさんのご家族が見守る中、自宅で静かに旅立たれました。驚いたことに、息を引き取る間際に大好きだったウイスキーを少しだけ味わうことができ、一瞬表情が和らいだそうです。

旅立ちの瞬間は、小学生と中学生の孫娘さんたち4人が「おじいちゃ〜ん」と声を上げながら抱きつき、大号泣でしたが、少し落ち着きを取り戻したあと、「おじいちゃんの髪の毛をお守りにする」と言いながら、それぞれがはさみでおじいちゃんの髪の毛を少しずつ切って、袋に詰め始めました。笑いあり、涙あり、とても微笑ましい光景でした。

退院からご自宅で過ごせた時間は、1ヶ月半ほどでしたが、後日ご家族より、「最高の最期でした。何の後悔もありません」と仰っていただきました。最期の最期まで大好きなお酒を味わい、お孫さんたちが祖父の死を「怖いこと」と思わずに自然に受け入れ、髪の毛をお守りに……。在宅だからできること、おうちで本当にいいなあと思ったエピソードでした。

学会発表してきました！

新潟で開催された第5回日本在宅医療連合学会大会に参加してきました。在宅医療に取り組む全国の仲間たちと久々に会う事が出来、それぞれの取り組みや課題などの情報交換が出来ました。また、会場では当院で務めたのちに高知県で開業された南大揮先生にもお会いできました。益々のご活躍をお祈りします。



Dr. 岡田の南極物語リターンズ



第15回：南極観測隊医療隊員の資質についての考察（前編）

ドーム旅行も後半に差し掛かったところで、今回は南極観測隊医療隊員の資質について考察してみました。①医者が活躍することを望まれていない：南極観測隊は厳しい健康診断をクリアした人のみが参加している。そんな中、医療隊員が活躍するということは、急な病気やケガがいくつも発生したということになる。隊にとってこのような状況は望まれていない。②オールラウンダー：南極観測隊には毎回2名の医療隊員が参加していて、全ての疾病に対応している。手術を行う可能性もある。そのため南極では専門の科だけしか診ることができない医者は必要とされない。ちなみにドーム隊の医療隊員は1人であり、しかも2か月間以上、昭和基地から離れた環境の中で、全ての責務を担う。僕自身は外科+総合医といったオールラウンダーの経歴からドーム隊に選ばれた。③自分が病気に罹ったり、怪我をすることができない：ドーム隊では医者が1人しかいない以上、医療隊員は常に元気でいなくてはならない。自己管理を徹底し、体調を崩さないよう努力する必要がある。これはフィジカルだけではなく、メンタルに関しても同じ。しかし僕は、この旅の中で何度か調子を崩してしまった。④創意工夫ができる：南極では医療物資や設備、マンパワーなど、全て限られている。「物が無いから」「人がいないから」と不満を言ったところで何も進まない。常に創意工夫しながら問題を解決していく能力が必要とされる。⑤専門以外の仕事の方が圧倒的に多い：急病人が出た時以外、医者としての出番はない。そのため医療隊員はそのほとんどが観測のサポートや、生活を支える設営の手伝いをしている。ドーム旅行隊で僕は雪上車の運転、食事、掘削作業などできることは何でも行って来た。ちなみに医者以外の仕事をやりたくない人は南極観測隊に必要とされない。



職員研修を行いました

6月30日に全スタッフ（約90名）を対象とした研修を行いました。テーマを「つばさクリニックが理想する在宅医療とは？」として、職種や世代関係なく、それぞれの立場と経験から意見を出し合いました。



映画上映会を行いました

埼玉県の在宅医に密着したドキュメンタリー映画「人生をしまう時間」の上映会を開催しました。地域の病院で患者さんの退院支援をサポートしているコメディカルの方にご参加頂き、在宅医療の実際を映画を通してお伝えさせて頂きました。

